

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教育学 ）	氏名	住 田 裕 子
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p style="text-align: center;">協同学習の効果に影響する要因に関する実践的研究 －相互作用プロセスにおける共同注意行動に着目して－</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p>主 査 教 授 井 上 弥</p> <p>審査委員 教 授 山 内 規 嗣</p> <p>審査委員 教 授 児 玉 真 樹 子</p> <p>審査委員 准教授 藤 木 大 介</p>			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>本論文は、協同学習の学習効果に影響する要因として、相互作用プロセスにおける共同注意行動に着目し検討したものである。協同学習の効果に関しては、学習者同士の相互作用が学習理解を促進する効果が確認される一方で、安定して学習効果が得られないことも指摘され、協同学習の有効性は相互作用を規定する様々な要因によって大きく変化すると考えられている。相互作用を規定する要因としては、構成員の行動や認知的能力の差、ペアの組み合わせなどがあげられる。しかし、相互作用において学習理解に関わる用語の保持情報を含めた共同注意に着目した研究はこれまでになく、学習効果と協同学習中の学習者同士の注意の共有との関係については、十分に明らかにされていない。このことから本論文では、協同学習中の相互作用プロセスにおいて学習理解を促進する要因を、共同注意行動の概念を拡張した学習者同士の注意の共有の観点から明らかにしている。</p> <p>論文は、5つの章から構成されている。</p> <p>第1章の「研究の背景と目的」では、協同学習の学習理解促進の効果とその要因についてこれまでの研究を概観し、協同学習の相互作用における学習者同士の共同注意が学習理解促進に影響を及ぼす可能性について論じている。従来の研究では、説明の行為が学習者自身の理解を精緻化すること、認知的葛藤を解決する方略を構築することが学習理解を促進すること、個人の思考を活性化し説明を精緻にするために他者の役割が大きいことが明らかになっている。これらを踏まえ、本研究では、協同学習で学習理解が促進されるためには、まず他者のもつ情報の理解に努める言動が重要であるとして、学習者が他者の考えにいか言及し、そこでの発話が学習理解と結びつくかを相互作用の質と捉え検討する必要性を述べている。また、他者の考えについて言及する際に出現する補完の発話に着目し、補完の発話が出現する仕組みとして、外的には観察できない保持情報の同時想起について拡張した共同注意モデルを作成している。そして、協同学習中の学習者は各々が想起する情報を共同注意行動によって相互に探り合い、それが合致した時に相手の発話を補完することが可能になるとして、他者との共同注意が学習理解促進に及ぼす影響を検討することの必要性を論じている。</p> <p>第2章の「協同的問題解決場面における深い概念理解を促す相互作用プロセス型の検討」では、</p>			

小学校の算数科授業の協同的問題解決場面における各児童の相互作用プロセスを類型化し、概念理解を深める相互作用プロセスの型を検討している。その結果、他者視点取得型と協調型のペアが概念理解を深めるのに適したペアであり、中でも、他者視点取得型とペアになった協調型の児童が最も理解を深めることを明らかにした。また、この組み合わせによる相互作用では、自分の自己中心的発話、相手の他者視点言及発話、そして相手の言及に答える形で、自己の既存の知識の枠組みが変容したことを示す調節的発話が生起するというプロセスを経て、協調型の児童が学習理解を深めていくことを明らかにしている。

第3章の「概念理解を深める相互作用プロセス型における共同注意発話の検討」では、児童の追跡的共同注意発話、誘導的共同注意発話を手がかりにして、相互作用プロセス型の特徴を検討している。その結果、協調型と他者視点取得型のペアは、追跡的共同注意発話を受けた後に追跡的共同注意発話へ移行することが多いこと、また追跡的共同注意発話を繰り返す追跡サイクルから、調節的発話が出現することを明らかにしている。さらに、調節的発話において説明された方略は、児童の概念理解を深めることを示している。

第4章「追跡的共同注意行動に関する事例的検討」では、児童の追跡的共同注意行動が生起する条件について検討し、児童の共同注意発話スキルの有無の条件に加え、協同学習を行う他者との対等な関係や学習理解への自身の必要感により、追跡的共同注意行動が出現すると考察している。また、注意の切り替えと新たな注意対象への焦点づけが負担となる児童の存在について言及し、注意対象を追跡すること以外の負荷を可能な範囲で取り除くこと、共同注意成立までの時間を確保することを実践的な支援策として挙げている。

第5章「総合的考察」では、第2章から第4章の実践的研究に基づき、協同学習の効果に影響する一つの要因は相互作用プロセスの質を左右する注意の共有であること、注意の共有のために追跡的共同注意の繰り返しが有効であることを考察している。協同的な学びにおいて学習効果を高めるのは、対等な立場で共に理解を構築しようと注意対象を追跡し合う相互作用であること、児童は他者の注意の追跡を待つことや他者の視点に自分を合わせていく追跡的共同注意行動をとる必要があることを示した。

本論文は、以下の3点において高く評価することができる。(1) 共同注意の概念を協同学習に拡張し、協同学習中の想起された情報の共有を相互の発話のタイプから分析し、協同学習プロセスを可視化している点、(2) 協同学習の学習者の組合せによって、相互作用プロセスの質が異なることを明確にした点、さらに(3) 相互作用プロセスの質が学習効果に影響する重要な要因であることを明らかにした点の3点である。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与されるに十分な資格があると認められる。

令和3年2月12日